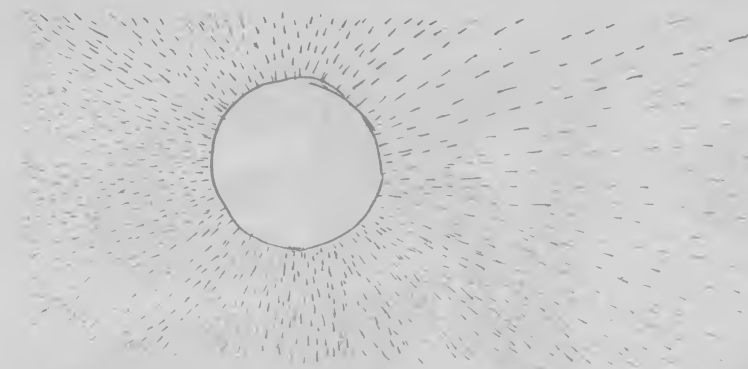
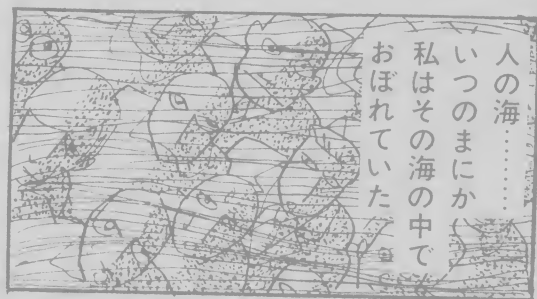
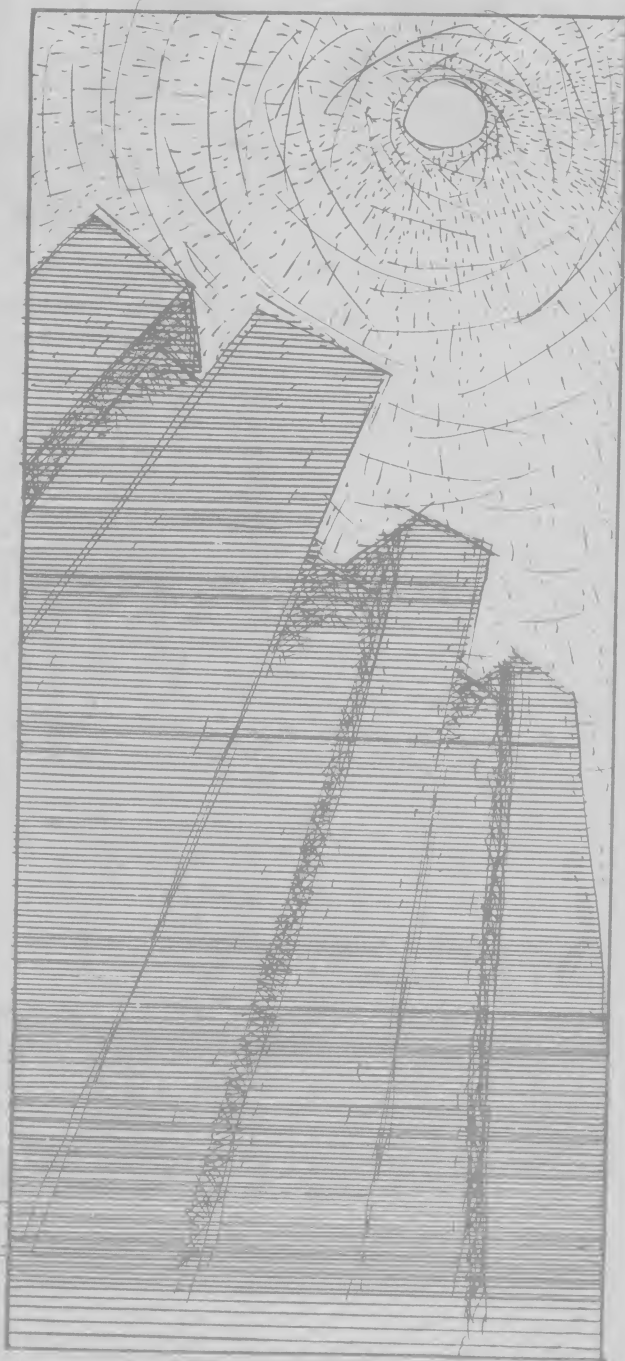
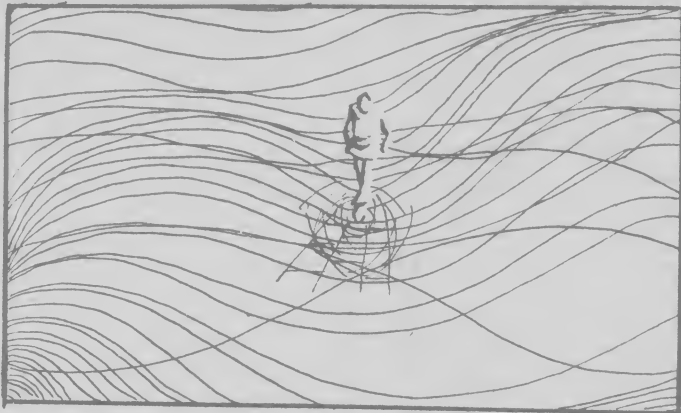
太陽の詩
入選作品
せと・みづみ

……………たしかあの日は
朝から太陽が
照りつけていた………

私の足は
人の海と車の洪水からのがれるために
いずこへともなく行進をはじめていた

この行進は、あのレミングのように
私自身「死の行進」をしていたの
だろうか…………

………それとも「生への執着」だったのか………

分らない………
私は無意識のうちに
歩いていた
ただ休息をもとめて………

気がついてみると
この世界には
私と太陽だけが
存在していた

太陽だけが
…………

オーイ
オート
オーイ

おれは
あのとき
騒音の都会
へ帰ろうと
思ったが……

だが……
あの太陽が
おれの足を
うばってしま
ったのだ

あの太陽が

おれの意識に
反して肉体は
太陽に向かっ
てずんずん
進んでいく

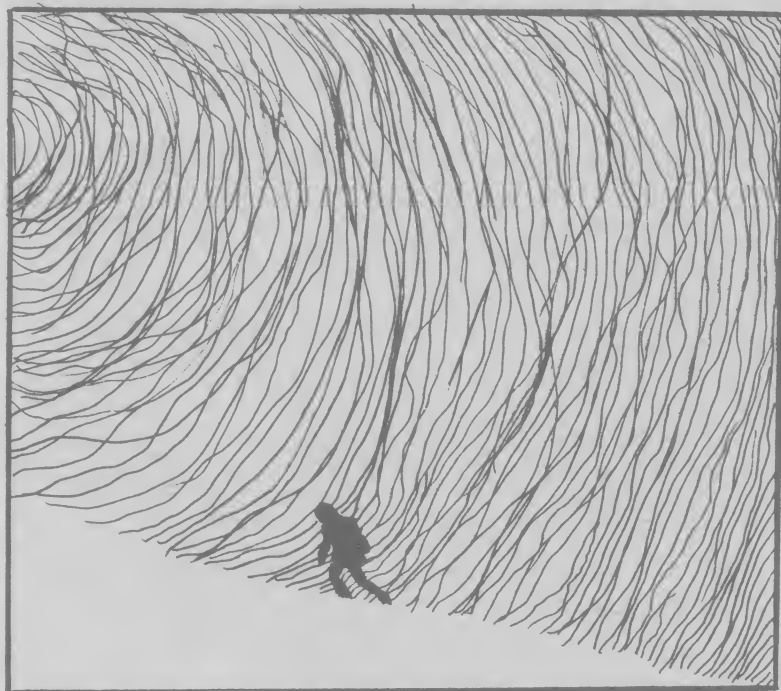
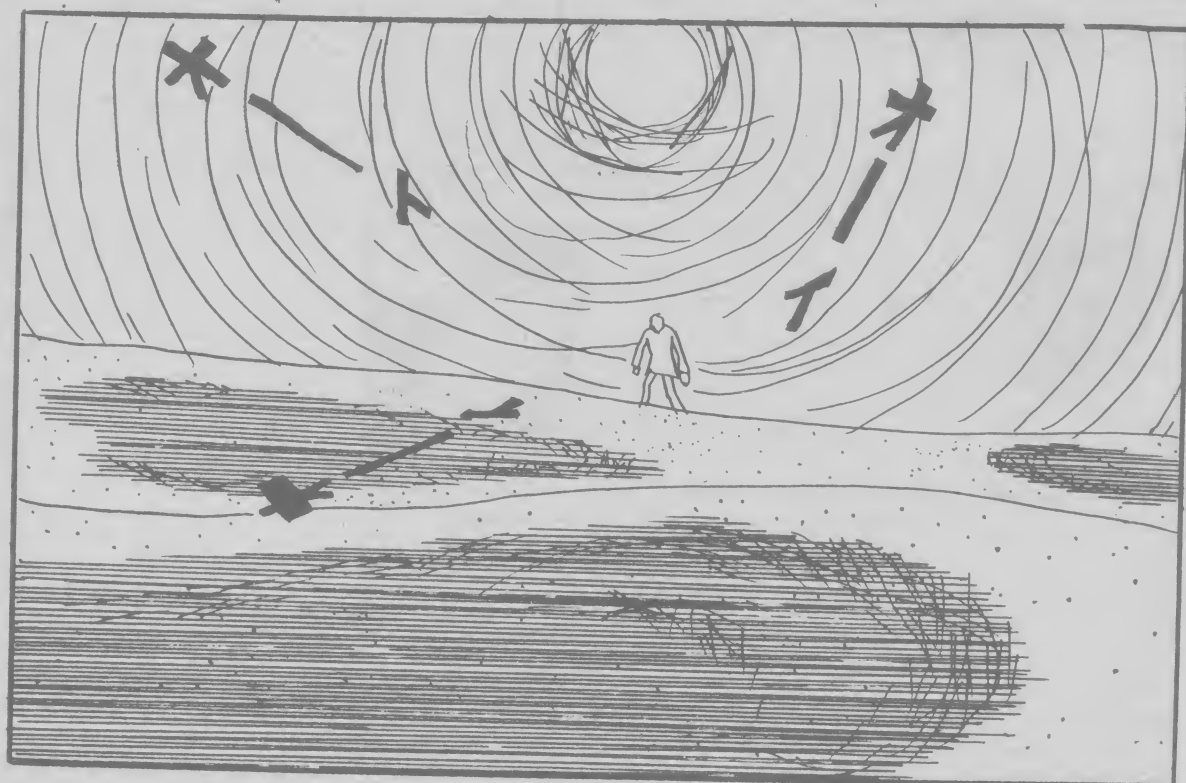
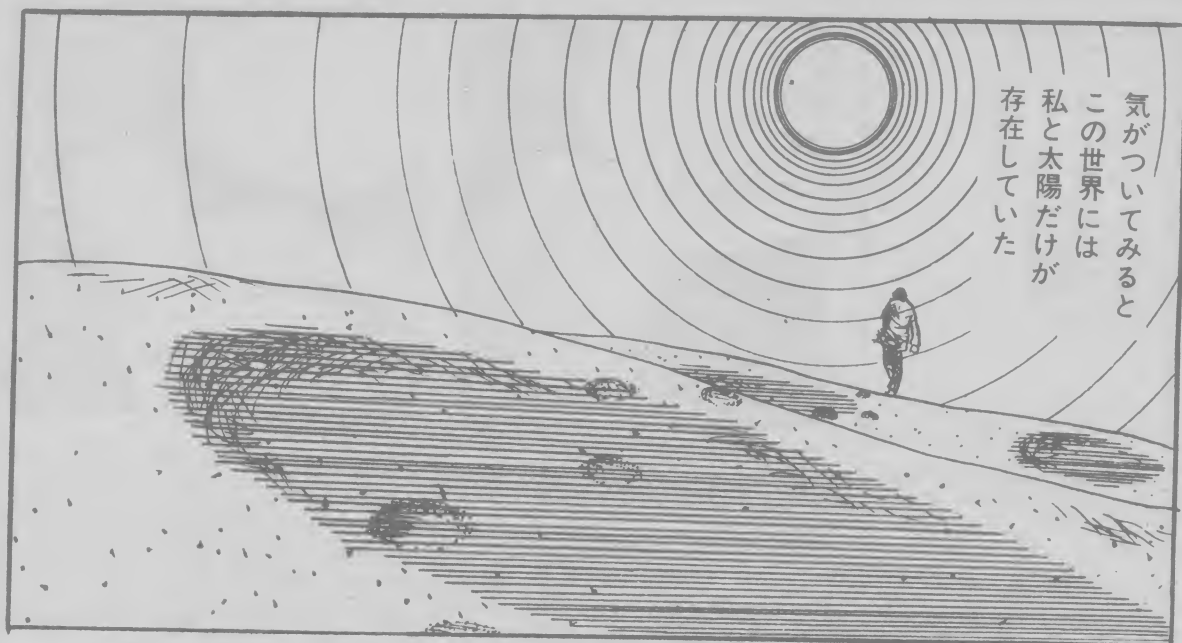
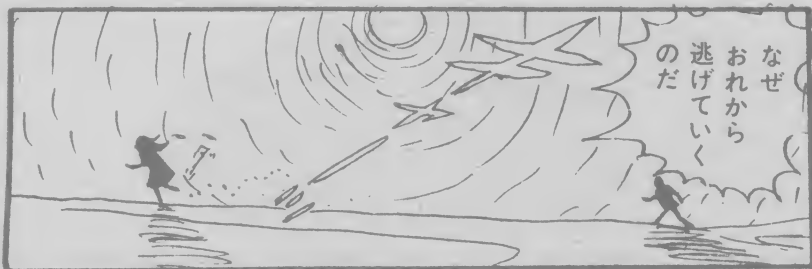
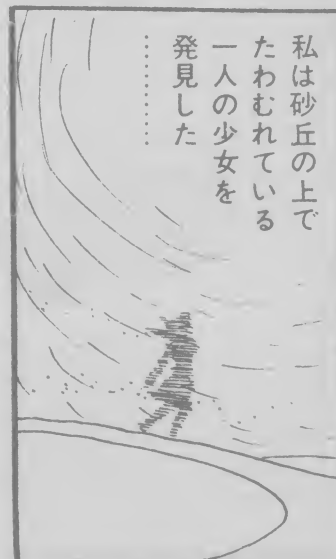
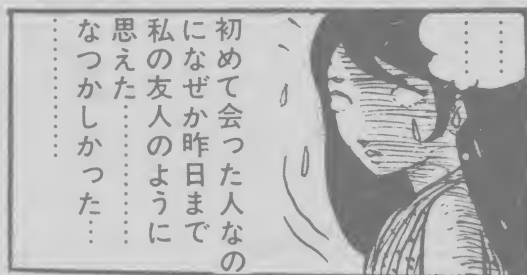
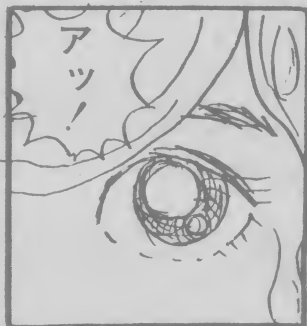
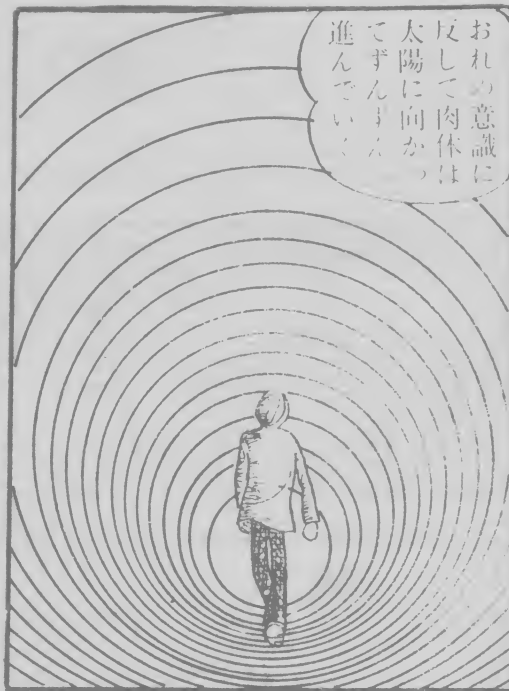
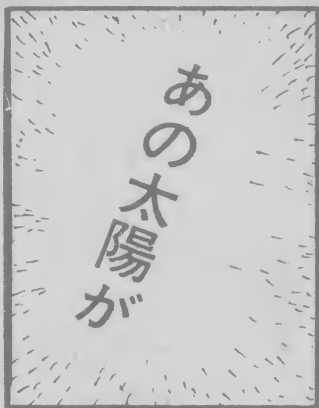
あつい……
私はただ人に会う
ことのみを念じなが
ら歩いていた……

……

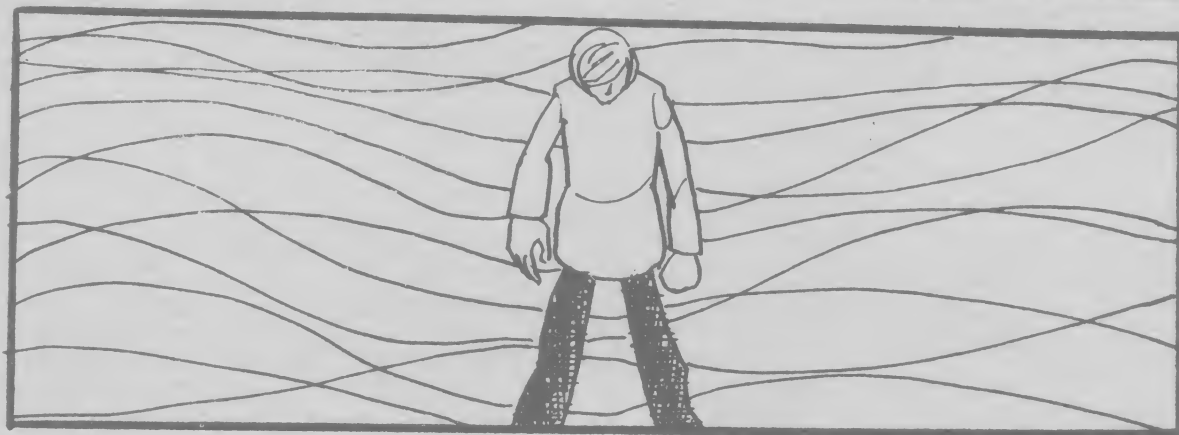
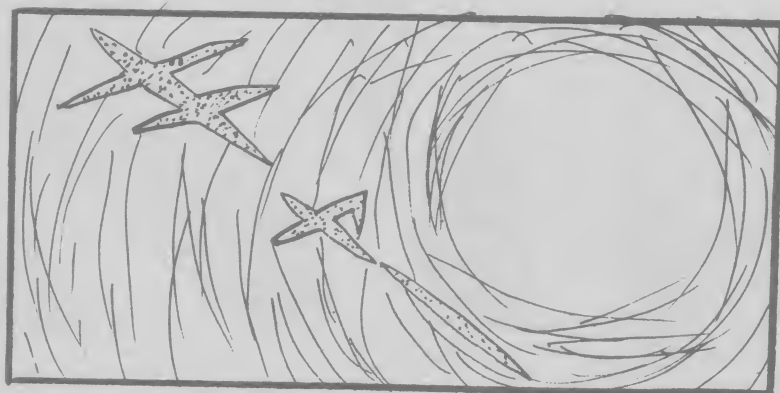
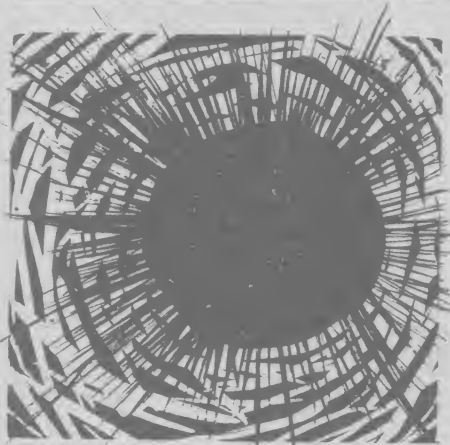
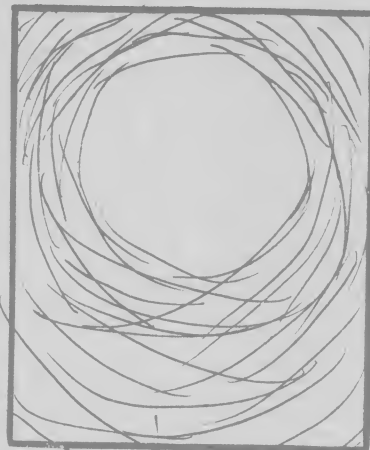
私は砂丘の上で
たわむれている
一人の少女を
発見した……

……
初めて会った人なの
になぜか昨日まで
私の友人のように
思えた……
なつかしかった……

少女は私の顔を
みると
アッ!

なぜ
おれから
逃げていく
のだ

このとき……
人へのあこがれ
絶望感・不安感
などが僕の心を
急激にかきむ
しった
なぜおれを
一人ぼっちに
するのだ
キャア
私の肉体は
一つの物質と
化して少女を
追った
このとき
私の身体は
私の物ではなかった
もう誰の物でも
なかった

ザザー
だれかー
たすけてー
ザッ
ザッ
ザク
ザク
ザザー
アッ！
海！
ザッ
ザッ
ザク
ザク
なぜ
私のあとを
つけてくる
の………
………
ザザー
ザザザー

……よらないで……
……よらないで……

このとき
まるで太陽に
吸いこまれた
ようだった
…………

あの日おれの行動を一日中ながめていたのはおまえだけではないか！

ほんとうにおれが殺したのか！

太陽の詩　完　S 42.7 25